

ウクライナ軍による越境攻撃について

真部 朗

はじめに

8月6日にウクライナ軍がロシアのクルスク州に越境攻撃を始めてから一か月が経過し、当初は不明瞭であった当該攻撃に係る情勢が相当程度明らかになってきている。本稿は、今回のウクライナの興味深い軍事行動について、公開情報に基づいて現時点における整理・分析を試みるものである。

越境攻撃の現況と狙い

ウクライナ軍は、8月6日の攻撃開始以来、ロシア領内で急速に占領地域を拡大した。占領地域の明確な範囲は不明だが、シルスキー総司令官は、8月28日に1294平方キロメートル以上を制圧したことを明らかにし、また、8月30日までに約100の集落を制圧し、35キロ奥地まで進軍したとしている。もっとも、ロイター通信によれば、その後の前進には行き詰まりがみられる模様である。

今次越境攻撃の狙いについては、ウクライナ当局からは全容が明らかにされているとは言えないが、専門家の分析を含めて整理すれば、概ね次の点が指摘されている。

第一に、プーチン政権やロシア軍に圧力をかけることである。外国軍に領土を占領されるのは第2次大戦以降初めてとされることから、それを許したプーチン政権の権威は著しく傷つけられることになるはずだというわけである。

第二に、ロシア市民に恐怖を与え、えん戦気分を広げることである。市民は、自分の土地を追われることになれば、戦争を深刻に感じざるを得ないであろうし、ひいては「特別軍事作戦」が国民の支持を失い、その継続が困難になることが期待できるであろうというわけである。

第三は、ロシア軍部隊をウクライナ東部からクルスク州へ転戦させることにより、東部戦線の状況を改善することである。そうなれば、これまで東部で劣勢が続いていただけにウクライナ軍にとっては朗報となるであろう。今回の越境攻撃が「クレムリンを狼狽させ、軍事資源を分割させることを目的としている」とウクライナ政府が主張しているとする8月20日のAP通信の報道は、かかる狙いに言及したものとも考えられる。

第四に、将来の停戦・和平交渉においてロシアと対等な立場を確保することである。確かに、これまではロシアが一方的にウクライナ領土の一部を占領している状況であったのに対し、ウクライナもロシア領土の一部を占領できれば、それはウクライナにとって有力な交渉材料となり得るように見える。徐々にロシアの軍事的優勢が強まり、また、ウクライナ国内でも停戦への期待が高まりつつあったタイミングでの今次越境攻撃の政治・外交的狙いがかかるといえるのは説得力のある見解と言えよう。

第五は、自軍の士気の高揚である。ロシア軍に一方的に押し込まれている地上戦の戦況を

越境攻撃によって打破することは、確かにウクライナ軍の士気高揚につながり得るであろう。

第六は、ロシアに隣接するスーミ州に対するロシアからの攻撃の緩衝地帯の設定である。これは、ゼレンスキー大統領が8月18日に公に述べた越境攻撃の目的と一致している。

第七は、欧米諸国がウクライナに課している長射程兵器に対する制限の解除である。欧米諸国は、核兵器国であるロシアを刺激して戦争が過剰にエスカレートすることを防ぐために、ウクライナに供与した ATACMS のような長射程兵器の最大射程での使用を禁じ、また、それ以上の射程を有する兵器の供与を控えているとされる。ロシアの領土内に深く進軍してみせることによってロシアの反発を恐れる必要はないことを示し、かかる制限を取り払うことが今次越境攻撃の狙いの一つという見方である。

ロシアの反応

複数の報道によれば、ロシアのプーチン大統領は、当該越境攻撃を「テロ攻撃」と称し、FSB と国防省に対して越境したウクライナ軍部隊の駆逐を命じるとともに、その作戦の「監視役」に国家評議会書記のデュミン氏を任命したとされる。

この報道内容の意味するところは、第一に、ロシアは、越境したウクライナ軍の駆逐作戦を「特別軍事作戦」とは別の作戦と明確に位置付けているということである。「特別軍事作戦」はロシア連邦軍のグラシモフ参謀総長が総司令官を兼ねているのに対し、駆逐作戦は文民のデュミン氏に統括させることとして指揮命令系統を別にしてしているのは、その証左であろう。

また、越境攻撃を「テロ攻撃」と位置付けることは、当該攻撃がテロリストによるものということになり、ロシアにとっては交渉の余地がない問題であることを示唆している。もっとも、越境攻撃をテロと称するのは、問題を矮小化しようとする試みであるとの分析もある。しかしながら、ロシアで対テロ戦と言えば、最も記憶に新しいのは推定2万人以上の犠牲者を出した第2次チェチェン紛争（1999年～2009年）であり、テロと呼称することが脅威を小さく見せる効果を有するとは考えられない。また、越境攻撃をウクライナ軍による軍事侵攻と捉えたとすれば、国家の存立が危機に瀕したとき等における核使用を規定する核ドクトリン（「核抑止の分野におけるロシア連邦の国家政策の基礎」（2020））により核使用の可否の問題が生ずるところ、かかる問題を避けるためにあえて「テロ攻撃」と位置付けたとの分析もあるが、ロシアの核ドクトリンは自国に対する攻撃がテロか否かを区別していないので、この分析も当を得ているとは言い難い。

また、ロシア軍は、クルスク州方面に東部戦線の戦力を大規模に転用したりすることなく、同戦線での攻勢を継続しているものとみられるのみならず、むしろ攻撃を強化したとの見方がある。実際、越境攻撃後もロシア軍による占領地は徐々に広がっている模様である。さらに、クルスク州知事代行は、約13万人の住民を避難させる一方、地域の安全確保のために有志による新たな部隊を創設したとされる。この措置も、越境攻撃に対しては、「特別軍

事作戦」とは別に対処するというロシアの方針を示唆するものと解することができる。

ロシア国民の反応については、8月30日に公表されたロシアの世論調査機関（レバダセンター）の世論調査によれば、プーチン大統領の支持率は85%で越境攻撃後も変わっていない。これは、第2次大戦後初めてロシアの領土が外国軍に占領された事態を前にしても、ロシア国民にさしたる動揺が見られないことを示しているものと言えよう。

ウクライナの誤算

ウクライナによる越境攻撃に係るウクライナ側の狙いとロシアの反応を対照してみるとウクライナの誤算が明らかであるように見える。

上述の狙いの第一、第二については、レバダセンターの調査結果を見る限り、プーチン政権の権威が損なわれ、国民の不満や不安が高まっている様子は窺えない。また、反ロシアを基調とする欧米メディアからもその種の報告は提出されていない。

同様に、第三についても、越境したウクライナ軍部隊の駆逐のために東部戦線から主要な部隊を引き抜くつもりがロシアにないことは今や明らかである。

第四については、まだ具体的に実証されているわけではないが、ロシアがいかなる「テロ攻撃」についても「テロリスト」とおおよそ交渉する意志がないことは既定の方針として明らかであり、このことは、ウクライナ侵攻に係る将来の停戦・和平交渉においてロシア側が占領されたクルスク州を交渉対象にすることを拒否するであろうことを強く示唆している。そうだとすれば、ウクライナの政治・外交的な狙いは空振りということになる。

これに対して、第六、第七については、ロシア領土の占領実現により当初の狙いは実現できたと言えよう。ただし、ロシア・ウクライナ戦争全体における意義は限定的かもしれない。

第七については、まだその可否は明らかでなく、引き続き注視が必要である。

ウクライナの選択肢

上述のように、ウクライナによる越境攻撃の狙いの多くは、おそらく予想外のロシアの対応によって既に外れてしまっている。また、クルスク州の戦況については、9月に入ってから占領地域を拡大しているとの報道もなくなっており、逆に、ロシア軍の反攻が始まったとの報道（9月11日付朝日新聞）が出始めており、元々投入し得る戦力が限られているウクライナ軍にとってロシア領内で攻勢を続けることは困難であって、クルスク州のウクライナ軍部隊は今後守勢を強いられることになるであろう。

このような状況でウクライナの選択肢は多くない。一つは、占領地を維持して、ロシアの対応方針が変わるのを促すことである。実際、これまでのところ、ウクライナはこの戦略をとっているように見える。例えば、ウクライナ軍は、8月30日にクルスク州に隣接するベルゴロド州への攻撃を試みている。これは、戦線を拡大することにより、ロシアの対応を変えさせようとするものとみられる。また、9月4日の報道によれば、ゼレンスキー大統領は、NBCニュースのインタビューに対し、占領したロシアの領土を「無期限で保持する計画だ」

と述べているが、これもロシアを挑発して対応を変えさせようとする試みであろう。しかしながら、これまでのところロシアがこれらの挑発に乗る兆候はない。この選択肢を追求し続けた場合、今後、東部戦線でのロシア軍の攻勢が強化され、また、クルスク州での反転攻勢が本格化すれば、投入した虎の子の精鋭部隊が地の利のない敵地で大損害を被る恐れがある。

もう一つの選択肢は、ロシアの反転攻勢が本格化する前に、クルスク州に投入した精鋭部隊を引き上げ、東部戦線等での予備戦力に充てることである。これだけであれば、いわばジリ貧の選択かもしれないが、ロシアによる東部での占領地域の拡大を遅らせ、その間に米国の大統領選の結果等を契機として停戦・和平の途を巧みに追求できれば、いわば政治的な「損切」を首尾よく行う可能性が視野に入ってくるであろう。

ウクライナがどちらを選ぶかは不明だが、あえて言えば、早期に第2の選択肢に戦略を切り替えるのが現実的と考えられる。

おわりに

ウクライナ軍による越境攻撃は、戦術的には目覚ましい成功を取めた。東部戦線でロシア軍にじわじわ押される状況下で敵の虚を突いて局面の打開を図った極めて独創的な試みと評することができる。特に、ロシアの防衛態勢の隙をついて奇襲を成功させたことは、真に優れたインテリジェンス能力の賜物であろう。

しかしながら同時に、この攻撃は、軍事及び政治・外交両面で戦略的には失敗であったと評せざるを得ない。これは、プーチン政権の思考や行動を読み誤ったことによると言えよう。その意味ではインテリジェンスの失敗でもある。

今次の越境攻撃は、戦術的な成功と戦略的な失敗が同時に生じた稀有な例として戦史に残ることになるかもしれない。